

「神はご自分にかたどって人を創造された。主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。」（創世記 1 章 27 節、2 章 6 節）

* 「降誕節」から「年間」へ

カトリック教会は現在、「降誕節」（クリスマスからイエス様が洗礼を受けられるまでの期間）に続く「年間」という季節を過ごしています（一部のプロテスタントの教会では「公現節」と呼ぶようです）。神父が着用する祭儀用の服装は緑色を基調としますが、緑色が示す意味は希望、平和やいのち、成長です。典礼色といますが、色を用いて視覚に訴えつつ、季節感をもって過ごすことが求められているのです。「年間」ではなく「公現節」と呼ぶ方が意味としては伝わりますね。なぜなら、イエス様の誕生によって神さまの思いがすべての人に示されたことで、わたしたちの人生は神さまとともに歩むことができるということを教えられているからです。この季節は神さまによって公にされた救い主とともに歩む生き方を通していのちを育み、成長させ、希望をもって平和を実現するために過ごす季節なのです。

* 人の創造とその価値について。

創世記 1 章 27 節、2 章 6 節には、人が神さまに似せて、さらに土を成形して息（ヘブライ語で「霊」と同じことば）を吹き込まれて創造されたとあります。神さまの特別な思いがわたしたちを形づくっていることは大きな驚きと慰めです。注目すべきは「土の塵で形づくり」と「息を吹き入れられた」という二つの表現です。創造するだけでなく、それを完成させるためには熱意と根気が必要です。神さまはその熱意と根気で土の塵を丁寧にこねあげ、人を形づくり、その中に息、つまり神さま自身の息吹である霊を注入されて特別なものとして完成されました。この霊は幽霊のようなものではなくて、理性のはたらきを生み出す源と言い換えることができます。いわば理性を司る「心」そのものです。聖書によれば、人は本能に左右されることによってではなく、理性によって行動することのできる存在です。人が理性的動物だといわれる所以はそこにあります。つまり、理性がはたらくのは人が神ご自身に由来しており、だからこそ、人が何よりも価値ある存在であることの証なのです。クリスマスによって救い主をこの世に送られた神さまの意図は、ご自分が創造された人の理性に救い主をとおして直接はたらきかけ、支えることにあるので、困難なことがあったとしても少しの希望が大きな幸せにつながられることを自覚し、日々を大切に過ごすことができるのです。

1 月の宗教の時間では、子どもたちに餅つき（餅）についての話をしました。冷めたままの材料（もち米）では決して餅にはならず、必ず火や電気などの熱源によって蒸されないといけないこと、熱いうちに米粒をつき、熱いうちにうすから取り出し、形を整えないと出来上がらないことなどに触れて、わたしたちの存在も心も神さまの熱い思いと根気によって餅のように形が整えられていることを伝えました。そして、餅は冷めたままでは食べられないこと、熱源によって再び温められなければ食べられないことに触れることで、神さまがはじめから熱源をもって人を創造して（餅つきをして）完成させられたのだから、冷めたままの心ではなく、神さまによって再び温められて形を整えなければならないことが大切だとも伝えました。

人という存在も、授かっている心も、神さまが造って下さったものだからこそ、冷めた状態のままではふさわしく機能しないはずで、神さまの存在を奥底で感じ、温められることで人の価値を理解し、支え、心を動かすことのできる“わたし”になれますように。